

生活科

NO. 98 令和2年11月号 岡崎市現職研修生活科広報部発行

生活科を(私的に)振り返る

生活科部長 倉地 耕治

今年の夏、言語学者の外山滋比古先生が亡くなったというニュースが流れました。寺津に生まれ高校までを三河で過ごした外山先生は、ふるさとをととても大切にされ、「四季の会」(かつての「冬研」)等で何度もお話を伺いました。

代表作『思考の整理学』(1983年 筑摩書房)は読まれた方も多いでしょう。その最初に「ライダー人間と飛行機人間」という文章があります。教えてもらわなければ学べない人・自分から考えられない人のことを、車や機械で引っ張ってもらわなければ空を飛べないライダーにたとえたのです。そして「学校はライダー人間の訓練所である」と、当時の教育を批判します。先生と教科書に引っ張られて勉強するだけで、自分の力で学び知識を得ていないというのです。新しい文化の創造には、自ら飛び立てる(自ら学べる)飛行機人間を育てる努力が必要だと外山先生は言います。今から40年近く前のことです。

しばらくして「生活科」が誕生します。体験を重視し、体験に基づいた気付きを大切に、自立への基礎を養うことを目標にしました。先生が教え込まず、子どもの気付きを引き出す生活科成立の背景には、『思考の整理学』が影響を与えたのではないかと勝手な想像が膨らみました。

平成とともに、生活科はその地位を確かなものにしてきました。「活動あって学びなし」などと批判されることもありましたが、しかし、幼児教育との接続の重要性、自然認識や社会認識に加え、自己認識の重要性などが理解され、「気付き」というキーワードとともに成果をあげてきました。

平成13年、私も教員生活唯一の生活科実践の機会を得ました。2年生からもらったアイガモの卵を教室で孵化させ、1年間飼育しました。卵を割って出てくるヒナに歓喜し、土日や夏休みは、子どもたちが交代で持ち帰って世話をしました。少し大きくなってからは、池で泳がせたり、中庭で遊ばせたりしました。研究授業は、コースを工夫してアイガモレースをしました。

この時担任した子どもたちの中の3人が、岡崎市内の学校に勤める教師になりました。小学校1年生のことを覚えているか聞いてみました。3人とも、たくさんの思い出を書いた返事をくれました。一部引用します。

「卵が本当に育っているかどうか、暗い部屋で卵に光を当て、光に透かして中のヒヨコを見たときは驚きました。ヒヨコが卵をくちばしで割り、羽をばたつかせながら出てくるのを眺めていて、とても感動したことを覚えています。池で泳がせていた時、体の油がなくなってだんだん沈んでいくピーちゃんを、先生が身を乗り出して助けただけで手遅れで死なせてしまった時はすごく悲しかったです。ピーちゃんは供養塚ではなく、みんなが遊んでいることが見える中庭の奥に埋めました。・・・アイガモたちは最後どうするの?ということ話し合った時は、結論がなかなか出ませんでした。自然にはなしてはいけなし、自分たちがこれからずっと面倒見ていくの? どうするの?と。最後は米農家さんにもらってもらったけれど、『命を育てること』について、すごく考えさせられました。」

拙い実践でしたが、子どもたちの記憶に残る経験ができたと思います。1年にわたる動物とのふれあいは、命とその責任を実感させます。死に出会うと命のはかなさも心に沁みます。だからこそ小学校1年生の子どもが、アイガモを最後にどうするか真剣に話し合えたのでしょう。

外山先生の言う「飛行機人間」たちは、自ら飛び立ち、社会の中核として、岡崎の教育の担い手として活躍を始めています。生活科に関わるわたしたちは、「飛行機人間」たちを育ててきた誇りを持ち、コロナ禍にあっても、体験と活動に基づく新たな実践に取り組み続けたいと思います。



平成13年11月